

■ トムラウシ山を例に

トムラウシ山を事例として考えてみましょう。現行計画では、利用施設計画で登山道を整備することとされています。しかし、利用者にどのような体験を提供すべきかは書かれていませんし、どのような登山道を整備すべきかも必ずしも明らかではありません。そこで、ROSを用いると次のような対応が可能となります。

トムラウシ山は大雪山を代表するすぐれた山岳環境を残しているの、たとえば原生区域として区分すると、山小屋は設置しない、階段などの歩きやすさを優先した登山道の整備は行わない等、施設整備を軽微なものに留めるといった方針を明確に出来す。次に、利用計画と保護計画との関係について考えてみましょう。

トムラウシ山には、近年非常に多くの登山者が訪れており、登山道脇の植生踏み付けや、南沼キャンプ地における自然環境の悪化、混雑による体験の質の低下など、さまざまな問題が発生しています。トムラウシ山は現在の国立公園計画の保護規制計画によって特別保護地区に指定されていますが、このような問題に対処するためには、もう少し踏み込んだ対応が必要です。

たとえばトムラウシ山を原生区域として区分すると、体験の質を確保するという点から、利用者を制限する必要がある。そこで、利用規制計画において利用調整地区の導入や、短縮登山道の廃止によりアクセスを悪くすることで利用者を制限するといった対策が見えてきます。また、これによって保護施設計画で大規模な保護施設を整備する必要がなくなります。他方、もしトムラウシ山を、原生性がやや低い自然区域とするなら、ある程度の登山者の入り込みを想定しなければなりませんから、保護施設計画で、よりしっかりした植生保護施設を作る必要が生まれます。

このように、ROSを用いることによって、自然公園計画の枠組みの中で対応可能な選択肢を絞り込むことができ、より包括的で実行性のある計画とすることが出来ます。

■ 終わりに

いかがでしたか。ROSがどのようなものであるかご理解いただけましたか。ROSは自然公園全体の利用と管理のあり方を考える上で、大変有用な考え方であります。ROSに基づくゾーン区分は、自然公園によって当然違ってくるものです。我々は大雪山国立公園を5つのゾーンに区分しましたが、いつもこの5区分が妥当なわけではありません。また、各ゾーンの利用と管理のあり方も、個々の自然公園によって異なってくるはずです。

みなさんも自分の関心のある自然公園を題材としてROSを考えてみてください。

山岳レクリエーション管理研究会

小野 理 北海道環境生活部 総務課主任
庄子 康 北海道大学大学院 農学研究科助手
土屋 俊幸 東京農工大学大学院 共生科学技術研究部助教授
広田 純一 岩手大学 農学部教授
八巻 一成 (独)森林総合研究所北海道支所 主任研究官
山口 和男 (有)自然環境コンサルティング 代表取締役

(肩書きは2005年6月現在。50音順)



小野 理



庄子 康



土屋 俊幸



広田 純一



八巻 一成



山口 和男